

○谷津鳥獣保護区保全事業に至るまで

谷津干潟では、ラムサール条約登録湿地に指定されて以降、環境の変遷に対応してヘドロの悪臭対策の検討、泥の流出に伴う干潟の環境調査、水鳥の給餌環境の調査、アオサ調査など、干潟の保全に向けた各種の調査・検討が進められてきました（以下参照）。これらの流れを受けて、平成 22 年度より鳥獣保護区保全事業が取り組まれてきました。

《経緯》

・昭和 46 年度～昭和 49 年度（1970 年～1973 年度）にかけて、埋め立て事業が行われました。しかし、干潟周辺で埋立て・道路整備等の大きな開発事業が生じたものの、道路近傍の地形変化を除けば、干潟環境に大きな変化はみられませんでした。

↓

・昭和 58 年・昭和 59 年度（1982 年・1983 年度）には、干潟のヘドロ対策と、野生鳥類の生息地としての環境を保全するための整備方針の検討が行われました。

・1970 年代から 1980 年代にかけては、埋め立て時に投入された泥が干潟内に流出し始めたと考えられますが、生活排水の流入もあり、有機物が豊富でゴカイ類の優占する泥質干潟が成立していました。

↓

・昭和 63 年度（1988 年度）には、国指定鳥獣保護区に指定。平成 5 年度にラムサール条約湿地に登録され、干潟のよりいっそうの保全が図されました。

・1990 年代に入ると浄化センターが整備され、泥の流出の進行とともに有機物の減少や一部で砂質化がみられるなど、生物生息環境が変化しました。

↓

・平成 8 年度には、泥の流出等により干潟の環境が変化していることから、今後の管理の方向性や保全措置を定めた管理計画が策定されました。

↓

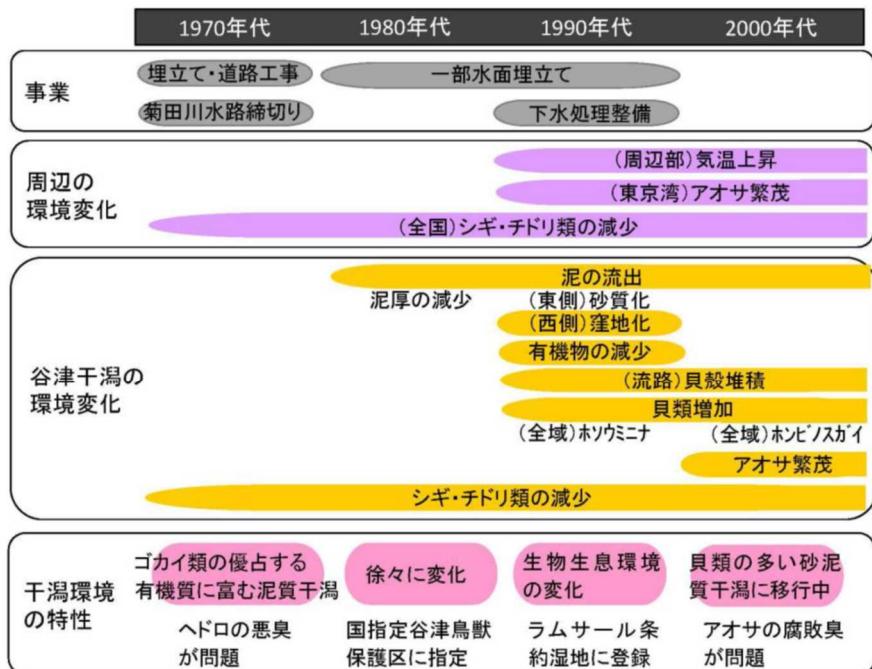
・平成 13 年～平成 15 年度には、国指定谷津鳥獣保護区における水鳥の給餌環境を把握するための調査が行われました。

・2000 年代は、干潟への潮汐の流れが緩やかになったことで 1990 年代に比べ地形変化の程度は小さくなつたと考えられますが、生物相では貝類増加やアオサ繁茂などがみられ、閉鎖性の高い砂泥質の環境特性へと変化してきています。夏季には枯死したアオサの腐敗臭が、周辺の生活環境を著しく悪化させている状況です。

↓

・平成 17 年・平成 18 年度には、アオサの発生等が鳥類の生息環境へ及ぼす影響を

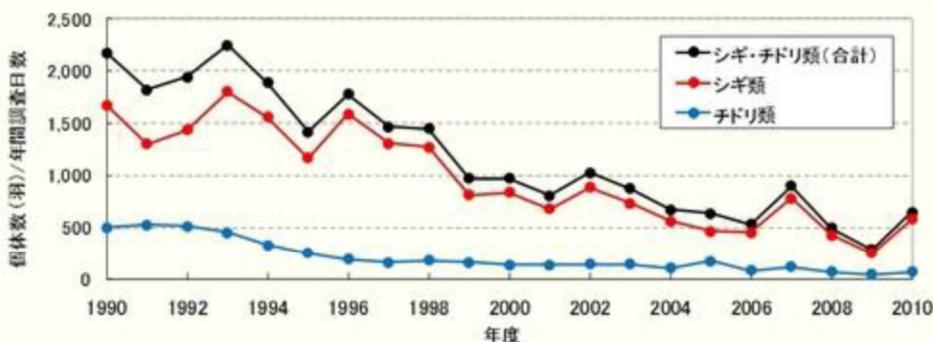
把握するための環境調査、鳥類の生息環境を保全するための手法や対応の方向性についての検討が行われました。



国指定谷津鳥獣保護区における環境の変遷

併せて、シギ・チドリ類の飛来数は全国的に減少しており、谷津干潟においても 1970 年代から減少傾向にあり、1990 年頃に比べて 1/4 程度となっています。

谷津干潟におけるシギ・チドリ類の減少と 1990 年代以降に見られた環境変化との関係は不明であるが、干潟環境が変わったことは明らかであり、特にゴカイ食のシギ・チドリ類にとって望ましくない方向の変化と考えられています。



国指定谷津鳥獣保護区におけるシギ・チドリ類個体数の変化

出典: 関東地方環境事務所調査結果をもとに作成

2005 年度までは原則月 2 日調査、2006 年度からは原則月 4 日調査

近年では、1990 年代に見られた地形変化の進行の程度は小さくなっていますが、生物生息の基盤となる条件が今後、急激に変化するとは考えにくい状況にあります。(ただし、2011 年 3 月に発生した東日本大震災により、地盤が全体的に 5 cm から 15 cm 程度沈下しました。)

一方では、2000 年代は貝類増加やアオサ繁茂等が見られており、このまま続くと干潟の底生生物相に占める貝類の割合が増加する可能性があり、結果としてゴカイ食のシギ・チドリ類が更に減少する可能性が懸念されます。